

障害あっても共に暮らすまち

上原公子さんにインタビューしたとき、国立市の障害者問題にも注目した。あとから上原さんの本を読み、ネットですこし調べて、標題について納得できた。『しなやかな闘い』から、障害者に関わるところを一部紹介しておきたい。

この国立は大変小さいまちでございますけれども、立川段丘という平らな上にまちが開発されていますが、偶然にもその立川段丘の北の端っこに一橋大学、そして南の端に滝乃川学園があります。日本でも類稀なるすぐれた教育施設、ひとつは学問の府=一橋大学、そして障害児教育の施設=滝乃川学園、という二つの教育施設が同時にこのまちにやってきて、配置されて、そしてこの二つの施設を国立はかかえたまま、実は75年という歴史を築き上げてきたということ言えば、ひとつは一橋大学、そして滝乃川学園という二つの宝があって初めて、国立というまちが成り立ったということになるかと思えます。(写真は滝乃川学園のサイトから)



国立市は、障害者の問題でも日本で結構有名なまちです。全身性の重度障害者の方が、人口比で日本で一番多いまちだけでなく、自立して暮らす人が一番多いまちでもあります。国立市規模の自治体では、全身性の重度障害者の方が、比率でいえば4、5人いらっしゃるかなというぐらいだと思いますが、うちは、全身性の方が50人です。しかも、家族の方に面倒をみてもらうのではなく、自立して暮らしたいという方たちがそのぐらいいらっしゃいます。

また、国立市ではこういう宣言をしています。「しょうがしゃがあたりまえに暮らすまち宣言」

日本ではじめての宣言文だと思います。これは障害者が頑張っているまちだから宣言をしたのではないのです。支援費制度が始まる直前に障害者から陳情が出たんですが、彼らがなぜこういう宣言をしてほしいという陳情を出したかという、彼らは不安だったのです。「私たちがこのまちで生きていけなくなるから、一緒に暮らせるまちということ宣言してほしい」という願いだったんです。

そもそも国立市がなぜ障害者の多いまちになったかという、障害者の世界では有名な三井絹子さんという方がいらっしゃったことです。彼女は本当に重度で、今は背もたれの長いいすに座っておられますが、支える力もありませんし、もちろん会話もできませ

ん。わずかに動く指で文字盤を指すことで意思疎通ができるだけです。

彼女は、隣の府中市にある重度障害者の療養所で生活をしていました。彼女はすごく頭のいい人ですが、そこでの扱いは、人間としてではなく、生きていてほとんど迷惑だというふうな扱いを受けていました。

（彼女は施設を出ると国立市に引っ越してこられ、……障害をもちながら結婚して、子どもももうけました）

彼女が生きていけるということは、もっと軽い人はもっと生きていきやすいわけですから、希望をもった障害者が国立市にどんどん移り住むようになったのです。ですから、小さなまちですが、車いすをごく普通の風景として毎日みかけますし、みんなが普通の友だちになれます。

(2017年11月3日)